	項目内容	全く当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらでもない	やや当てはまる	よく当てはまる	逆の内容
14	あなたが促すと、はじめて会った人に喜んで話したり、おもちゃを見せたり、自分のできることをやって見せたりする。	1	2	3	4	5	
15	あなたが「ちょうだい」と言ったり「持ってきて」と言うとそのようにしてくれる。（ふざけていて従わない場合は考えに入れなくて良い。）	1	2	3	4	5	子どもからその物を取り上げるか、「渡しなさい」と声を荒げない限り渡してくれない。
16	あなたが抱き上げたり、抱きしめたり、可愛がると喜び、自分からもそれを要求する。	1	2	3	4	5	抱っこされても喜ばない。抱っこはされるが自分から要求しないし、すぐに降ろしてもらいたがる。
17	あなたが子どもに何かを頼むと、あなたが何をして欲しいかすぐにわかる。（従うか従わないかは問題としない）	1	2	3	4	5	
18	すぐにあなたに腹を立てる。	1	2	3	4	5	あなたがひどく邪魔をしたり、子どもが大変疲れたときでない限り、あなたに腹を立てることはない。
19	何かでびっくりした時、その場で泣く。	1	2	3	4	5	あなたがそばにくるのを待たず、自分からあなたの所に行く。
20	施設にいるとき、あなたが他の部屋に行くと怒ったり大泣きしたりする。（後追いするかしないかは問題としない。）	1	2	3	4	5	あなたが立ち去ることに気がつき、後追いすることもあるが、機嫌は悪くならない。
21	あなたに対してわがままで気が短い、自分の望むことをあなたがすぐにしないとぐずぐずいったり頑固に要求し続ける。	1	2	3	4	5	
22	あなたが立ち去ったことで機嫌が悪くなったとき、その場に座りこんで泣く。あなたの後を追うことはない。	1	2	3	4	5	機嫌が悪くなったり泣いたりすると、積極的にあなたの後を追う。
23	あなたに抱かれているとき、降ろして欲しいと合図するので降ろすと、ぐずったり、またすぐ抱いて欲しいと要求する。	1	2	3	4	5	子どもが降ろして欲しいという合図をしたときに降ろすと、そのまま遊びに行く。
24	子どもがして欲しいことをあなたがすぐにやらないと、まったくしてもらえないかのように振舞う。（ぐずったり、怒ったり、あきらめて他のことをしたりする。）	1	2	3	4	5	子どもがして欲しいことをあなたが、少し後でやってくれると期待して待つことができる。
25	あなたがちょっと手伝おうとしただけでも、していることを邪魔されたかのように振舞う。	1	2	3	4	5	あなたが実際に邪魔しない限り、手助けを快く受け入れる。
26	あなたに何かして欲しいときに、行動で示したり言葉で頼んだりするのではなく、泣いたりぐずったりして訴える。	1	2	3	4	5	本当に嫌なことがあったとき（疲れた、悲しい、恐い等）にしか泣くことはない。
27	あなたが、子どもの今してる活動を止めさせ、次の活動をさせようとすると、すぐに機嫌が悪くなる。（たとえ、新しい活動が子どものいつも喜ぶものであった場合も）	1	2	3	4	5	
28	活発な遊びの中で、たたいたり、ひっかいたり、噛みついたりして乱暴になる。（必ずしも、あなたを傷つけようというつもりはない）	1	2	3	4	5	活発な遊びの中でもあなたを叩いたり、ひっかいたり、噛みついたりすることはない。
29	遊びの後、あなたの方へ戻ってきたとき、はっきりした理由も無いのにぐずることがある。	1	2	3	4	5	遊んでいる最中や遊びの後、あなたの方に戻ってきた時、うれしそうにする。

愛着に関するチェックリスト　～施設職員用～

対象児：　　生年月日：
記入者：　　子供との関係：　　記入日：H　　年　　月　　日

＜１＞ 対象児は、他の人より好きな、頼りにしている特定の大人がいる。

いる　・　いない　　→「いる」に○をつけた場合：それは誰ですか？（　　）

＜２＞以下の項目について、あてはまるところに○をつけてください。

１）転んだり、怪我をした時に、対象児はある特定の大人（あなたを含む）になぐさめてもらいに来る。

①はい　②時々そうである　③いいえ

２）転んだり、怪我をした時、対象児がある特定の大人のところに行った時（あるいは、その大人から近づいた時に）、対象児は、なぐさめを受け入れる。

①はい　②時々そうである　③いいえ

３）対象児は、ほぼいつもイライラしていたり、悲しそうだったり、あるいは深刻な感じだったりして、周りの人と関わらない。

①はい　②時々そうである　③いいえ

４）対象児は、すぐに見知らぬ人に近づいて抱きついたり触ったりする。

①はい　②時々そうである　③いいえ

＜３＞対象児がある特定の人（＜２＞と必ずしも同一でなくてもよい）といる時、以下の行動は見られますか？あてはまるところに○をつけてください。また、①、②の場合、特定の大人は誰ですか？

１）対象児は、自分で危ないことをする。（例：車道の方へ走って行く、ストーブに触る、高いところに上って飛び降りる等）

①はい　②時々そうである　③いいえ　→特定の大人【　　】

２）対象児は、見知らぬ人が周りにいる時、特定の大人にくっついて離れない。

①はい　②時々そうである　③いいえ　→特定の大人【　　】

３）対象児は、特定の大人の機嫌をいつもうかがっており、その大人を怖がっているように見える。あるいは、ロボットのように言うことを聞く。

①はい　②時々そうである　③いいえ　→特定の大人【　　】

４）対象児は、ある特定の大人が悲しんだり、怒ったり、動転したりすることを心配そうに気にしており、少しでもそうだと慰めようとする。

①はい　②時々そうである　③いいえ　→特定の大人【　　】

子どもの行動チェックリスト(2)　6ヶ月-2歳未満用

ID[　　]　イニシャル[　　]　記入日[　　]　記入者[　　]

お子さんに以下のような状況が見られますか？年齢的にまだできないと思われる事柄については「ない」とお答えください。

		よくある	ある	たまにある	ない	年齢的に不可能
1	ある特定の状況で、急に激しく泣くなど、表情や態度が変化することがある	1	2	3	4	5
2	些細なことでびくびくして不安そうにする	1	2	3	4	5
3	急に泣き出して止まらなくなる	1	2	3	4	5
4	普通以上に怖がる特定の人や物や場面がある	1	2	3	4	5
5	夜泣きが激しい	1	2	3	4	5
6	感情の起伏が激しい	1	2	3	4	5
7	ひとりで遊んでいることが多い	1	2	3	4	5

以後の設問において、お子さんにとって特別な存在である大人（担当職員やその他の職員）のことを「特別な大人」とします。
もしそのような「特別な大人」がいない場合には、担当職員を対象としてお答えください。

お子さんの普段の行動から以下のような様子が見られますか？		よくある	ある	たまにある	ない	年齢的に不可能
8	表情が乏しい	1	2	3	4	5
9	大人と関わろうとしない	1	2	3	4	5
10	「特別な大人」に対していい子ぶる、外面がいい	1	2	3	4	5
11	生き生きとしている	1	2	3	4	5
12	友達と仲良く遊ぶ	1	2	3	4	5
13	慰められてもなかなか気持ちが落ち着かない	1	2	3	4	5
14	ちょっとしたことで怖がって自由に遊ばない	1	2	3	4	5
15	「特別な大人」に抱かれていても、遠くをボーっと見ている	1	2	3	4	5
16	突然固まって、ぼーっとした表情をする	1	2	3	4	5
17	嫌なことがあったとき、怖い時、痛みを感じたときに、固まってしまったり、凍り付いてしまう	1	2	3	4	5
18	いつもいらいらしている	1	2	3	4	5
19	遊びに集中できない	1	2	3	4	5
20	悲しそうにしている	1	2	3	4	5
21	笑顔が少ない	1	2	3	4	5
22	凍りついた目あるいはうつろな目をしている	1	2	3	4	5
23	大人がいても自分で危険な行動をとる	1	2	3	4	5

お子さんには次のようなことがありますか？	よく ある	ある	たまに ある	ない	年齢的に 不可能
24　人のものをとったりする	1	2	3	4	5
25　ぐずることが多い	1	2	3	4	5
26　床や壁に自分の頭を打ち付けることがある	1	2	3	4	5
27　すぐに激しい泣き方になる	1	2	3	4	5

子どもの行動チェックリスト(2)　2-6歳用

ID[　　]　イニシャル[　　]　記入日[　　]　記入者[　　]

お子さんに以下のような状況が見られますか？年齢的にまだできないと思われる事柄については「ない」とお答えください。

		よくある	ある	たまにある	ない	年齢的に不可能
1	ある特定の状況で、急に激しく泣くなど、表情や態度が変化することがある	1	2	3	4	5
2	ある特定の状況で、こちらとかかわらなくなってボーとしていることがある	1	2	3	4	5
3	急に泣き出して止まらなくなる	1	2	3	4	5
4	親が「出来ていた」と言うことでも出来なくなっていることがある	1	2	3	4	5
5	寝つきが悪い	1	2	3	4	5
6	周囲に対して攻撃的である	1	2	3	4	5

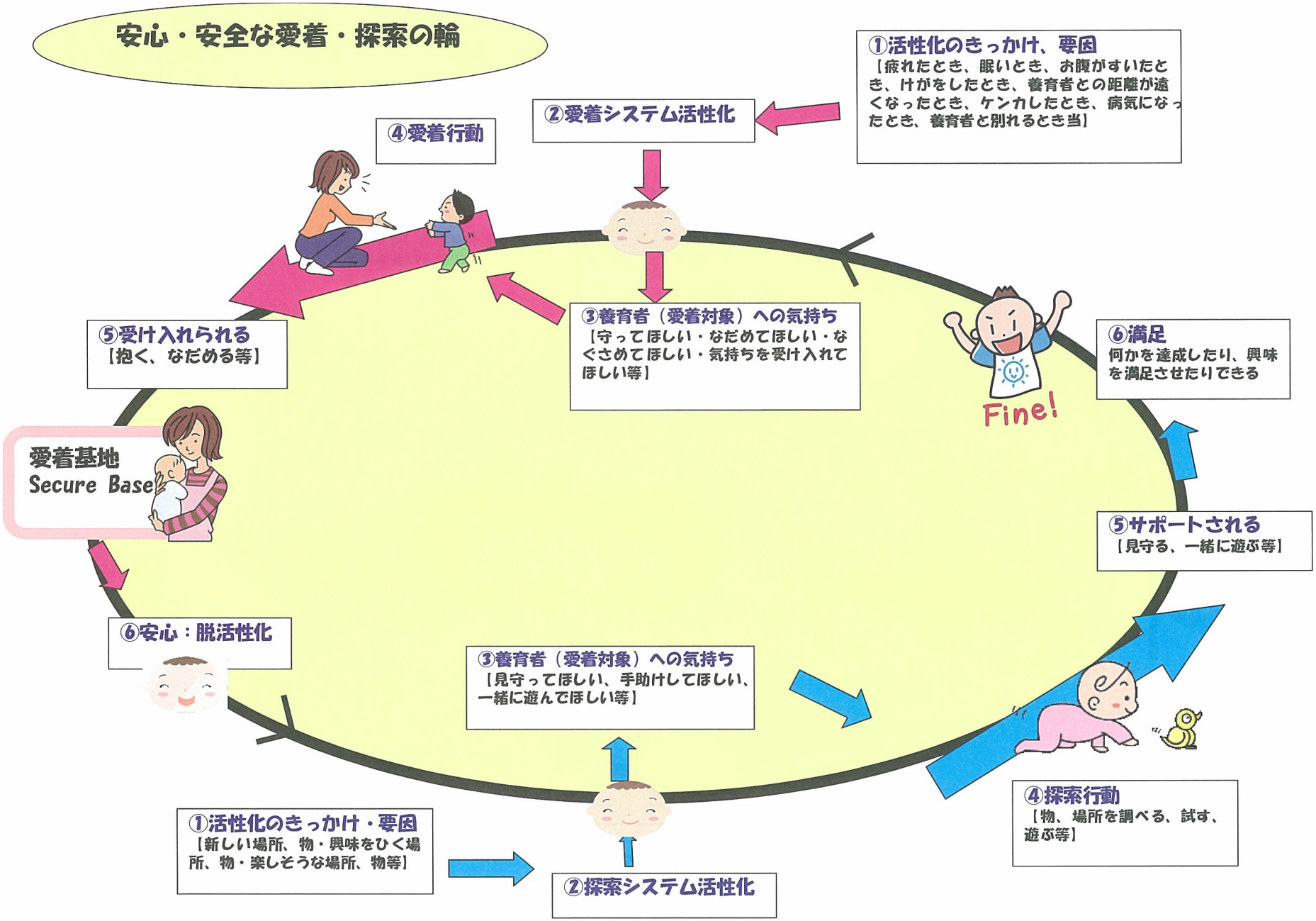
以後の設問において、お子さんにとって特別な存在である大人(担当職員やその他の職員)のことを「特別な大人」とします。もしそのような「特別な大人」がいない場合には、担当職員を対象としてお答えください。

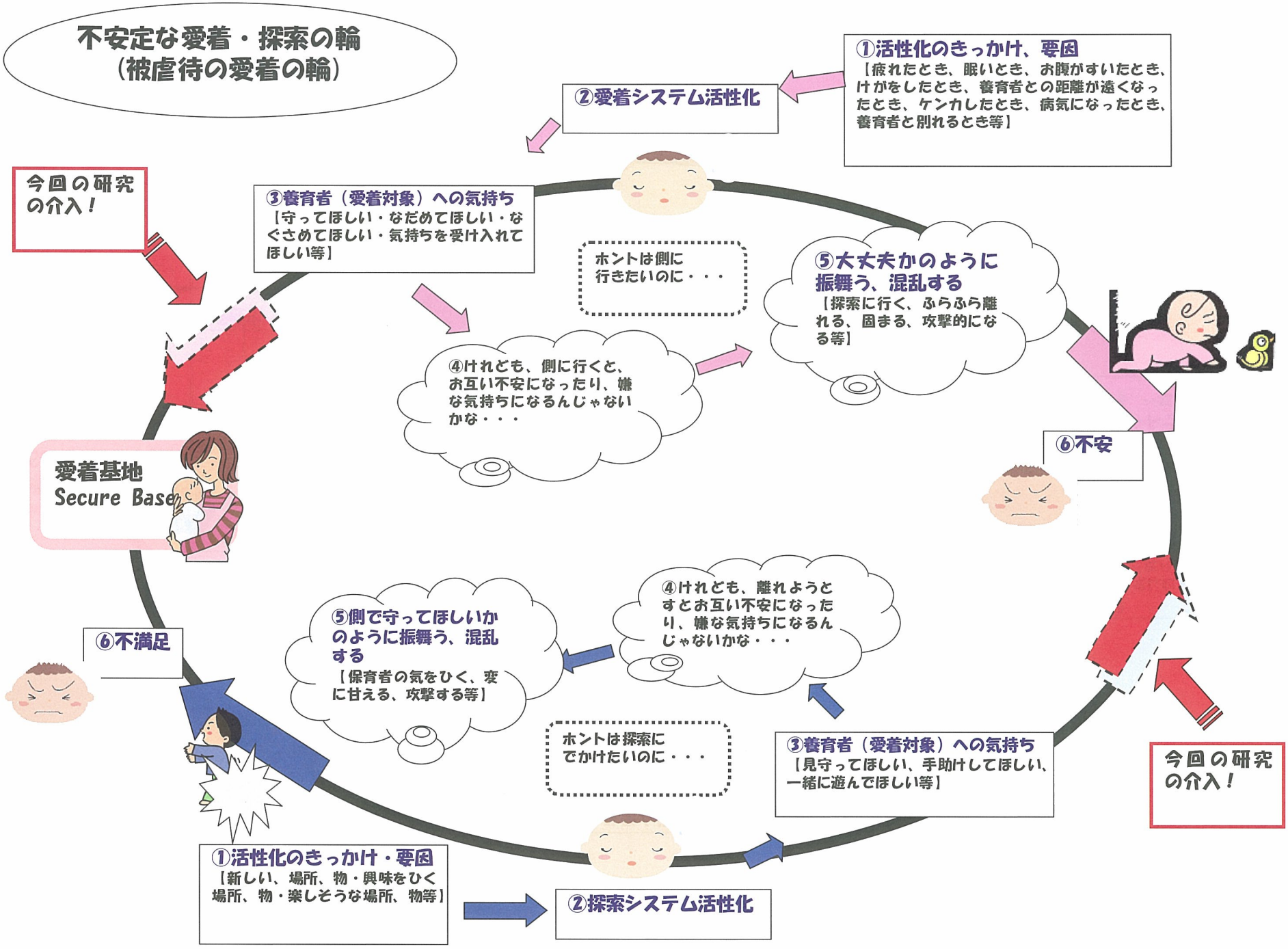
お子さんの普段の行動から以下のような様子が見られますか？		よくある	ある	たまにある	ない	年齢的に不可能
7	表情が乏しい	1	2	3	4	5
8	嫌なことがあったとき、怖い時、痛みを感じたときに、「特別な大人」に近づいて慰めを求めようとせず、固まってしまう	1	2	3	4	5
9	「特別な大人」に対していい子ぶる、外面がいい	1	2	3	4	5
10	危ないことを平気でする	1	2	3	4	5
11	表情が明るい	1	2	3	4	5
12	「特別な大人」の言うことを素直に聞く	1	2	3	4	5
13	慰められてもなかなか気持ちが落ち着かない	1	2	3	4	5
14	すぐに「特別な大人」に頼る	1	2	3	4	5
15	依存心が強い	1	2	3	4	5
16	大人に気に入られようと可愛い子ぶる	1	2	3	4	5
17	誰にでもべたべたしてくる	1	2	3	4	5
18	ちょっとしたことで怖がって自由に遊ばない	1	2	3	4	5
19	「特別な大人」に抱かれていても、遠くをボーっと見ている	1	2	3	4	5
20	突然固まって、ぼーっとした表情をする	1	2	3	4	5
21	嫌なことがあったとき、怖い時、痛みを感じたときに、固まってしまったり、凍り付いてしまう	1	2	3	4	5
22	「特別な大人」を困らせるような行動を多くとる	1	2	3	4	5
23	過度に警戒している	1	2	3	4	5

お子さんの普段の行動から以下のような様子が見られますか？	よくある	ある	たまにある	ない	年齢的に不可能
24 常に緊張している	1	2	3	4	5
25 いつもいらいらしている	1	2	3	4	5
26 遊びに集中できない	1	2	3	4	5
27 悲しそうにしている	1	2	3	4	5
28 笑顔が少ない	1	2	3	4	5
29 年齢不相応に動きが少ない	1	2	3	4	5
30 凍りついた目あるいはうつろな目をしている	1	2	3	4	5
31 目を合わせて笑いあうことが少ない	1	2	3	4	5
32 自分から甘えてくることが少ない	1	2	3	4	5
33 甘え方が下手である	1	2	3	4	5
34 次々に別の大人を求める	1	2	3	4	5
35 視線を合わせることが少ない	1	2	3	4	5
36 ちょっとしたことで固まってしまう	1	2	3	4	5
37 「特別な大人」を求めてくるがすぐに他へ向かう	1	2	3	4	5
38 「特別な大人」を求めていながら、ちょっとした事で避けてしまう	1	2	3	4	5
39 ひとりの大人と集中して遊べない	1	2	3	4	5
40 特定の大人との強いかかわりができない	1	2	3	4	5

お子さんには次のようなことありますか？	よくある	ある	たまにある	ない	年齢的に不可能
41 人のものをとったりする	1	2	3	4	5
42 友達と仲良く遊ぶ	1	2	3	4	5
43 気分や感情が急に変わる	1	2	3	4	5
44 ミルクや食事の量や速度にムラがある	1	2	3	4	5
45 活動が激しい時と遅い（おとなしい）時があり、一定しない	1	2	3	4	5
46 興奮するととめることが出来ない	1	2	3	4	5
47 気に入らないと通常以上に激しく泣く	1	2	3	4	5
48 泣き出すとなかなか止まらない	1	2	3	4	5
49 ぐずることが多い	1	2	3	4	5
50 かんしゃくが多い	1	2	3	4	5
51 かっとなると暴力的になる	1	2	3	4	5

		よくある	ある	たまにある	ない	年齢的に不可能
52	一つの行動から他の行動への切り替えがうまくいかない	1	2	3	4	5
53	大きな音を怖がる	1	2	3	4	5
54	大きな声で話す傾向がある	1	2	3	4	5
55	注射などを極端に嫌がる	1	2	3	4	5
56	転びやすい	1	2	3	4	5
57	不安定な場所を好む	1	2	3	4	5
58	ボール投げが年齢相応に出来ない	1	2	3	4	5
59	危険を顧みず、高いところに上ったり、飛び降りたりする	1	2	3	4	5
60	すぐに激しい泣き方になる	1	2	3	4	5
61	他人をもののように扱う	1	2	3	4	5
62	その場にあったことと表情が一致していない	1	2	3	4	5
63	友だちにやさしい	1	2	3	4	5
64	ルールが守れない	1	2	3	4	5
65	よくけんかをする	1	2	3	4	5
66	友だちに暴力を振るう	1	2	3	4	5
67	人のものをとって自分のテリトリーにためておく	1	2	3	4	5
68	小さい子に暴力を振るう	1	2	3	4	5
69	大人の言うことにことごとく反抗する	1	2	3	4	5
70	他の子をいじめる	1	2	3	4	5
71	力の強い子に支配されやすい	1	2	3	4	5
72	想像力が豊かである	1	2	3	4	5
73	力の強い人と弱い人に対する態度が全く違う	1	2	3	4	5
74	年齢不相応に性的な言葉を発する	1	2	3	4	5
75	汚い言葉を多用する	1	2	3	4	5
76	ものの扱いが乱雑である	1	2	3	4	5
77	非常に衝動的な行動をする	1	2	3	4	5
78	ストーリーのある遊びができる	1	2	3	4	5
79	集中力がない	1	2	3	4	5
80	遊びが次々に変わる	1	2	3	4	5
81	ままごとを楽しくできる	1	2	3	4	5


安心・安全な愛着・探索の輪
①活性化のきっかけ、要因
【疲れたとき、眠いとき、お腹がすいたとき、けがをしたとき、養育者との距離が遠くなったとき、ケンカしたとき、病気になったとき、養育者と別れるとき当】
②愛着システム活性化
③養育者（愛着対象）への気持ち
【守ってほしい・なだめてほしい・なぐさめてほしい・気持ちを受け入れてほしい等】
④愛着行動
⑤受け入れられる
【抱く、なだめる等】
⑥安心：脱活性化
愛着基地
Secure Base
⑥満足
何かを達成したり、興味を満足させたりできる
Fine!
⑤サポートされる
【見守る、一緒に遊ぶ等】
④探索行動
【物、場所を調べる、試す、遊ぶ等】
③養育者（愛着対象）への気持ち
【見守ってほしい、手助けしてほしい、一緒に遊んでほしい等】
②探索システム活性化
①活性化のきっかけ・要因
【新しい場所、物・興味をひく場所、物・楽しそうな場所、物等】


不安定な愛着・探索の輪
（被虐待の愛着の輪）
①活性化のきっかけ、要因
【疲れたとき、眠いとき、お腹がすいたとき、けがをしたとき、養育者との距離が遠くなったとき、ケンカしたとき、病気になったとき、養育者と別れるとき等】
②愛着システム活性化
③養育者（愛着対象）への気持ち
【守ってほしい・なだめてほしい・なぐさめてほしい・気持ちを受け入れてほしい等】
今回の研究の介入！
ホントは側に行きたいのに・・・
④けれども、側に行くと、お互い不安になったり、嫌な気持ちになるんじゃないかな・・・
⑤大丈夫かのように振舞う、混乱する
【探索に行く、ふらふら離れる、固まる、攻撃的になる等】
⑥不安
愛着基地
Secure Base
④けれども、離れようとすとお互い不安になったり、嫌な気持ちになるんじゃないかな・・・
⑤側で守ってほしいかのように振舞う、混乱する
【保育者の気をひく、変に甘える、攻撃する等】
⑥不満足
ホントは探索にでかけたいのに・・・
③養育者（愛着対象）への気持ち
【見守ってほしい、手助けしてほしい、一緒に遊んでほしい等】
今回の研究の介入！
①活性化のきっかけ・要因
【新しい、場所、物・興味をひく場所、物・楽しそうな場所、物等】
②探索システム活性化

添付資料８：第１回ミーティング資料

愛着に焦点をおいた養育

愛着班
厚生労働省科学研究

1

はじめに（1）

- 当研究につて
  虐待 → 愛着形成の不全 → 乳幼児期とそれ以降への心理・社会的問題 → 愛着に方向づけられた養育
- 研究3年研究の2年目後半：
  愛着に焦点を置いた養育プログラムの試行
  → 来年度、本格実施
- 愛着に焦点をおいた養育プログラム
  第1回ミーティング（本日）
  愛着チェックリストの定期的実施（2週に1度）
  第2回ミーティング，2006年11月
  第3回ミーティング，2007年1月

2

はじめに（2）

- 第1回ミーティング内容
  1．愛着とは何か？
  2．愛着に方向付けられた養育とは？
- 第2回、3回ミーティング
  ケースカンファレンス：
  特に児の愛着の形成について

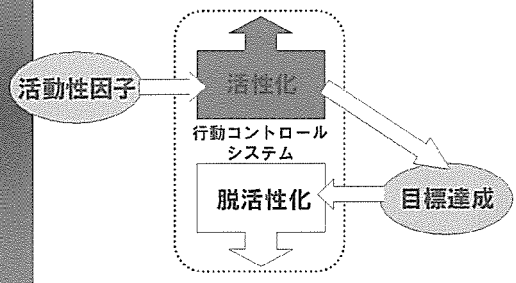
3

愛着とは何か？

- 多様な意味
① 愛着行動 ② 愛着の絆 ③ 愛着の関係性
④ 行動コントロールシステムとしての愛着
  1） 愛着　a. 目標 （外的）養育者との距離を詰める
  （内的）"安全を感じる"
  b. 活性化因子：恐怖、疲れ、養育者との分離
  知らない場所、知らない人など
  → 基本的信頼感
  2） 探索：好奇心・探究心
  3） 連携：他者（愛着対象以外）との社会的交流
  4） 恐怖 / 心配：戦いor 逃げる；危険のモニター

4

行動コントロールシステム



5

2. 乳幼児期の愛着についての研究（1）

（1）生得的なもの：生物学的に与えられている
（2）7－9ヶ月で、選択的愛着が明瞭になる：
　人見知り、分離不安
（3）愛着システムと探索システムとのバランス：
　安全基地現象 → 愛着・探索の輪
（4）愛着の分類（ストレンジシチュエーション）：
　安全型、
　非安全型
　　回避型、抵抗型、Disorganized/disoriented型

6

2. 乳幼児期の愛着についての研究(2)

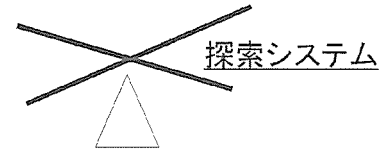
(5)愛着の病気: 反応性愛着障害 (DSM-Ⅳ)
(6)虐待と愛着形成:
　型としてのD型、
　病気としての反応性愛着障害(最重症例)
(7)愛着の形成の乳幼児以降における影響
① 非安全型
　(児童期) 友達関係、気分の変動、うつ症状、攻撃性
　　反抗挑戦性障害: (幼稚園生、小学校低学年、高学年)
　(青年期・成人期) うつ、解離性障害
② 施設児(反応性愛着障害)の予後:
　30年追跡調査: 平均学歴(里親) 12grade, (施設児) 3grade
　　結婚　(里親) 11/13: (施設児) 2/12
　→ 愛着に方向付けられた養育の重要性！！

7

安全基地現象

- Secure base phenomena

愛着システム

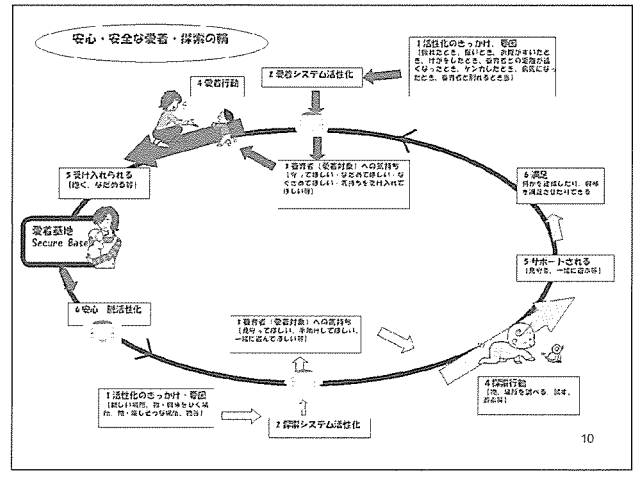


8

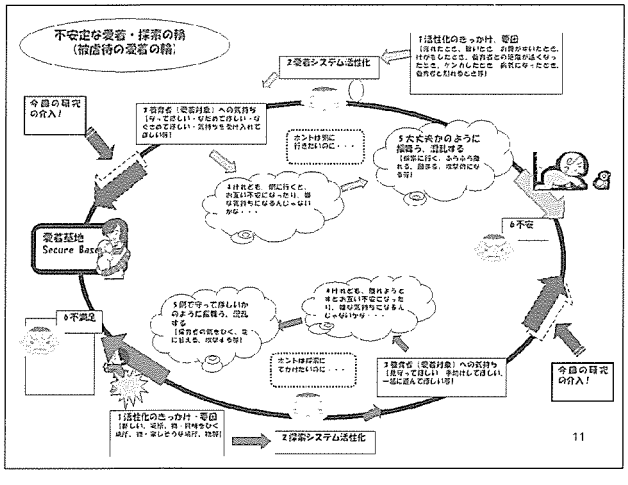
DSM-Ⅳの反応性愛着障害RAD

A. 5歳未満,ほとんどの状況で障害された対人関係
　(1)抑制型(ICD-10の反応性愛着障害)
　　対人的相互関係で開始・反応が不可
　　過度の抑制、警戒、両価性
　(2)脱抑制型(ICD-10の脱抑制愛着障害)
　　選択的愛着(－)、無差別的社交性
B. 発達の遅れで説明不可、PDD除外
C. 病的な養育
D. 病的養育がAの行動障害の原因

9



10



11

愛着に方向付けられた養育(1)

安全・安心な愛着・探索の輪を作る

1. 愛着
　<乳幼児の状態>
　　愛着システムの活性化(不安な状況にあるetc.)
　　→愛着行動が起こる
　<対応>
　　受け入れ・慰め・なだめる

2. 探索
　<乳幼児の状態>
　　探索システムの活性化(玩具に興味を示すetc.)
　　→探索行動が起こる
　<対応>
　　見守り・必要があれば手助けする

12

愛着に方向付けられた養育(2)

不安定な愛着・探索の輪を修復する

1. 愛着

＜乳幼児の状態＞

愛着システムが活性化している状況

(怖がってもおかしくない、不安がってもおかしくない状況)

にもかかわらず探索するor独り遊びする

＜対応＞

1)気持ちを理解してあげる

2)積極的に近づき、声をかけ、心配を表明する

3)嫌がったら、見守り、見守っているサインを送る

(声をかける、ある距離を置いてしかしそばにいる)

13

愛着に方向付けられた養育(2)

不安定な愛着・探索の輪を修復する

2. 探索

＜乳幼児の状態＞

愛着システムが活性化していない状況

にもかかわらず気を引こうとする行為、近づこうとする行為

＜対応＞

1) 気を引きたい気持ちは理解する、しかし

2)抱いたりかまったりしなければならないことはない

3)適度な距離をとり、中立的な反応でよい

14

愛着に方向付けられた養育(3)

入所早期に注意すること:

＜乳幼児＞

「養育者との分離」・「知らない人がいる」・「知らない場所である」などの原因で

ほぼ常に愛着システムが活性化している状態にある

＜対応＞

1)積極的に、こちらから距離を詰めて、なだめる

2)児がそれを嫌がったら

見守る、見守っているというサインを送る

(たまに声をかける、ある距離を置いて、しかしそばにいる)

15

愛着に方向付けられた養育(4)

■ 効果の確認

:愛着形成の進展・健全化しているか？

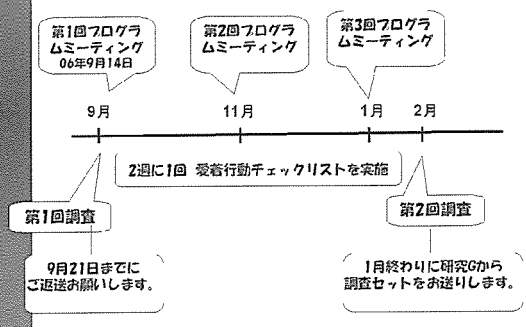
愛着と探索の輪

不安定な輪→安心・安全な輪

愛着と探索がバランスよくまわる

16

調査の概要



17

調査内容

① 子どもの個人票・・・最初に記入

② 愛着行動チェックリスト(ABCL)・・・2週間に1回

③ 愛着に関するチェックリスト

(愛着障害チェックリスト)

④ 子どもの行動チェックリスト（1）

⑤ 子どもの行動チェックリスト（2）

最初(H18年9月)と最後(H19年2月)に実施

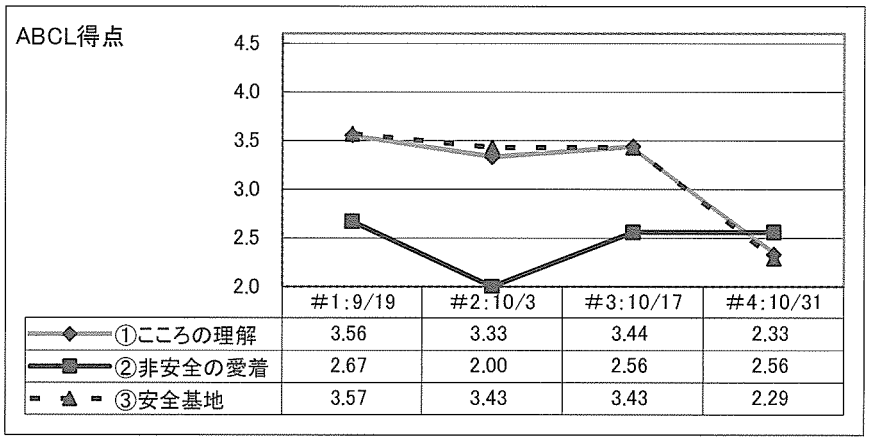
⑥ 身長・体重・頭囲・・・月に1度

18

児童養護施設名	A施設
対象児：	A
月齢	48ヶ月
入所期間	20ヶ月
虐待の有無	あり　　実母からの身体的虐待
親子接触（2ヶ月間）	外出（1）、外泊（3）
子身体疾患	硬膜下血種
子精神疾患	軽度の遅れ

●愛着行動チェックリスト【ABCL】

	#1：9/19	#2：10/3	#3：10/17	#4：10/31	全体平均	虐待児	非虐待児
①こころの理解	3.56	3.33	3.44	2.33	3.72	3.52	3.90
②非安全の愛着	2.67	2.00	2.56	2.56	2.48	2.45	2.55
③安全基地	3.57	3.43	3.43	2.29	4.04	3.90	4.20



●愛着障害チェックリスト

<1>頼りにしている大人がいる？	いる	担当職員
<2-1>けがの時、特定の大人になぐさめてもらいに来る	①はい	
<2-2>けがをして、特定の大人のなぐさめを受けいれる	①はい	
<2-3>いつもイライラ、悲しそう	③いいえ	
<2-4>見知らぬ人にもついていく	③いいえ	
<3-1>自分で危ないことをする	③いいえ	
<3-2>見知らぬ人がいると特定の大人から離れない	①はい	幼児寮職員
<3-3>特定の大人の機嫌をうかがう	①はい	担当職員
<3-4>特定の大人を気にかけ、なぐさめる	①はい	幼児寮職員

●子どもの行動チェックリスト（1）

別紙参照

外向尺度（攻撃的な行動や注意集中関連）	27
内向尺度（依存や引きこもり関連）	17

●子どもの行動チェックリスト（2）

下位尺度	得点	領域区分表		
		正常域	境界域	介入域
トラウマ	11	9点以下	10-11点	12点以上
愛着	47	58点以下	59-64点	65点以上
感覚・行動・調節	74	68点以下	69-79点	80点以上
総合得点	132	133点以下	134-149点	150点以上

厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
児童虐待等の子どもの被害、及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究
（主任研究者　奥山眞紀子）

分担研究報告書

分担研究者　田中　究　神戸大学医学部附属病院精神神経科

虐待など被害を受けた子どもの治療に関する研究

虐待を受けた子どものトラウマとその治療に関する研究

田中　究（神戸大学医学部附属病院精神神経科）

研究要旨

虐待をはじめとする児童の不適切な養育によって、児童にはさまざまな影響、特有の発達的歪みが生じ、時には長期にわたる病理をその人生に与える。こうした影響を軽減あるいは消退させる目的で、さまざまな心理療法が行われているが、その実態や効果は現在事例検討を通して知られるのに留まっている。本研究は、児童養護施設で行われている入所児童に対する心理療法の基本統計を含むその実態を明らかにし、施設長、施設職員、施設内心理職における心理療法に対する一般的な意識と評価を調査し、加えて心理療法を受けている入所児童とくに被虐待児について、心理療法の方法、位置づけ、効果判定などを個別に施設職員、施設内外心理職、こども本人の意識および評価を明らかにする。これによって、現行の児童養護施設入所児童における心理療法の内で効果的とされるものを抽出する。

さらに個別的な心理療法の枠内に留まらず、複数の入所児童に対して効果的に行われる集団療法を、米国で行われている演劇療法を参考にしながら、開発するものである。

研究協力者

森　茂起　甲南大学人間科学研究所
西澤　哲　大阪大学人間科学研究科

A．研究目的

不適切な養育によって、子どもには愛着障害、トラウマ反応、自己価値観の低下などの心理的障害が生じ、適切な心理学的介入あるいは治療がなければ、その後に気分障害、解離性（転換性）障害、人格障害などの精神障害に発展していくことについての報告が多くなされている。不適切な養育に直面させられた児童は、その環境への介入（例えば親子関係への調整的治療的介入など）がうまく機能しない場合には、保護され、さらに児童養護施設、情緒障害児短期療育施設などに処遇される。こうした施設児童に、精神障害への端緒と考えられるような解離反応、行動障害が多数発見、児童に対する介入方法として様々な方法が試みられている。児童が心的外傷として認知している心的外傷そのものを標的として扱うトラウマ志向型の方法であり、もう一方に心的外傷から保護され安全で安心できる環境を提供する方法（環境療法）であり、現実的にはこの２つが折衷的に取り入れられ、用いられている。つまり、児童に安全で安心できる環境が提供され、その環境下

あるいは心理相談機関、医療機関でトラウマ志向型の治療介入が採用される。これらの治療介入法の多くは個人精神療法で行われ、箱庭療法をはじめとする遊戯療法の中でのポストトラウマティックプレイセラピー（遊戯療法の中で児童のトラウマ反応を見いだし治療的介入を行う）あるいはＥＭＤＲ（眼球運動による脱感作と再構成法）、力動的精神療法などが行われている。成人で行われている長期曝露療法（治療的セッティングで外傷的体験を想起しながらその体験強度を脱感作していく治療法）は児童期にはあまり用いられていない。また、グループ（集団）精神療法も推奨されているが、グループミーティングや心理教育の枠内にとどまることが多いが、音楽療法、サイコドラマ（演劇療法）などが少数報告されている。

心理的介入や治療の導入は強調されているが、治療に関しては個別の報告にとどまり、どのような児童を対象に、どのような形態で、どのような場所で、どのような内容の介入や治療が行われているのか、その有効性や効果がどの程度なのか、虐待を受けた児童に関する全体像は明らかではない。こうした基本的状況を明らかにしておくことは今後の被虐待児の心理療法の適用や効果を考える際に不可欠である。

また、不適切な養育を受け、児童養護施設など家庭外で集団生活している児童に対する個別心理療法を通して、心理療法の場における個別的関係の中での心理的変化が得られることが臨床的に経験することである。しかし、集団生活の場においてこうした変化が保持されることが困難で、環境療法下において成長による変化を待つ姿勢を取る必要があることを臨床家は経験している。これらは児童養護施設の施設そのものや職員、児童の構成、構造なども含めて考慮されるべきではあるが、効果的な心理療法的接近法を検討、開発していくことが必要である。その一つとして、複数の児童に対して行う集団精神療法があるが、これまでにも児童養護施設では例えば、キャンプや旅行などの比較的無構造な集団療法的アプローチは用いられてきている。しかし、それは集団精神療法としてではなく、レクリエーションの一環として行われており、今後は構造化された集団精神療法への移行を模索する必要があると考えられる。こうした集団療法の一つに、Boston のトラウマセンター（B.A.van der Kolk 主宰）で行われている演劇療法（theatre therapy）があり、われわれは注目している。これは、児童における集団精神療法として行われ、心的外傷に関連した社会状況の認知や情動の変化を目的とするのみならず、攻撃性、自己効力感などの変化をも期待されるものとされている。理論的には、運動野、感覚野、連合野、辺縁系に神経線維を投射している視床に、感覚運動（身体運動、リズムなど）による入力があり、それが統御されたものとして脳の各領野に出力され、感情や認知の統御が期待されるというものである。このような構造化された集団精神療法は稀にしか行われておらず、検討する必要があると考える。

Ｂ．研究方法

１．児童養護施設における心理療法の実態調査

兵庫県児童養護協議会および神戸市養護施設連盟に加盟する児童養護施設（28 施設）に入所している児童で、何らかの心理的問題や精神科的な問題で相談機関、医療機関にかかっているものの実態、すなわち、人数、心理的精神科的問題の内容、治療介入年数、方法、児童の変化を把握することと同時に、児童養護施設の施設長、直接処遇職員、および児童養護施設および相談機関等の心理療法担当者を通して、児童の個別的な心理療法への導入理由、その効果と問題点などを、また児童自身にも心理療法の満足度などに関する調査票を作成し、各施設の施設長、直接処遇職員、心理担当職員に対してアンケート方式で調査した。

なお、兵庫県児童養護施設協議会および神戸市養護施設連盟との間で本調査に関しての、児

童の個人情報保護等についての倫理的配慮について文書によって、契約を交わしている。

2．集団精神療法の試行

現在提唱されている治療介入法についての文献的検討を行うと同時に、一施設（尼崎市社会福祉事業団尼崎学園）をモデル施設として集団精神療法的な治療介入法を試行する。
これは先述した Boston のトラウマセンターで行われている演劇療法（theatre therapy）を目指すものである。その導入として音楽療法を行い、それを通して児童の行動の変容を CBCL、CMTI 等によって評価する。

本施設はこれまでにも無構造な集団活動は行われていたが、しばしば児童の攻撃的な行動が問題となって、個人精神療法や薬物療法が選択されてきた。これらの治療法は一時的な改善はもたらすが、持続せず、再発することがしばしば見られた。この状況の中で、集団活動の中で作品をつくり、その達成感を得やすいものを提供する試みの中で、音楽療法（合唱）が選ばれた。これは、児童全体に案内を行い、活動日時を掲示することで、希望者が集まるかたちで開始された。さらに、今後は音楽療法が定着した段階で、音楽療法から自己のストーリーを集団の中で語る治療セッションを設け、そうした語りを音楽療法の中に表現できる方法を検討していく。

音楽療法は職業的音楽家に毎週来てもらい、隔週で実際に子どもへのセッションは月に2回行われている。職業的音楽家の技能を児童に披露することだけでも、児童は音楽療法の中に参加する意欲を高めることができるが、児童を音楽の中に巻き込み、合唱作品を作ることをより効果的に行うことが職業的音楽家に期待できる。この中で新たに音楽療法に加わる児童に対する効果の評価をはじめ、その効果や適応を検討し、効果判定を行い、総合的に治療の適応と方法を明確にする。

本研究に関して、尼崎学園との間に児童の個人情報保護等に関する倫理的配慮を行う旨の契約書を交わしている。

C．研究結果

兵庫県児童養護協議会および神戸市養護施設連盟に加盟する児童養護施設（28 施設）の内、26 施設の参加の承認を得たが、実際の参加は 24 施設(85.7%)であった。

この 24 施設に対してアンケート施行に先だって行った調査では、施設長数は 24 名、常勤の直接処遇職員数は 363 名、常勤・非常勤の施設内心理職員 64 名であった。また、何らかの形で心理療法を受けている児童はのべ 435 名あり、そのうち心理療法を施設内で受けているものはのべ 377 名、施設外でも受けているものが 51 名であった。

児童養護施設入所児童に対する心理療法への一般的な意識と評価についての調査への回答数（率）は施設長 23 名(95.9%)、直接処遇職員 336 名(92.6%)、心理療法担当職員 51 名(79.7%)であった。

また、特定の児童に関しての心理療法の方法、位置づけ、効果判定などの個別アンケートに関する調査への回答数は直接処遇職員 312 名、心理療法を受けている児童数に対する割合は 71.7%、心理療法担当者全体では 351 名、心理療法を受けている児童数に対する割合は 80.7%、施設内心理療法担当職員の回答数は 326 名、施設内で心理療法を受けている児童数に対する割合は 86.5%、施設外での心理療法担当者からの回答数 35 名、施設外で心理療法を受けている児童数に対する割合は 68.6%であった。

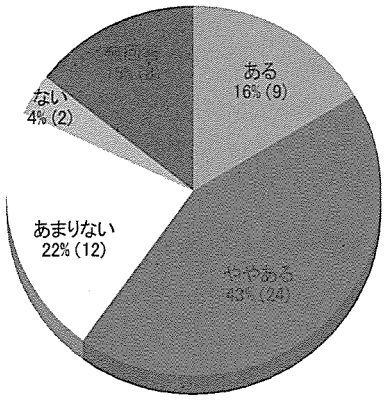
来年度、アンケート全体の詳細な解析を行う予定である。

なお、これら24施設のうち2施設に関して、一部解析の結果を示す。

特定の児童に関して直接処遇職員に対して、その心理療法の効果判定を尋ねたものである。

「子どもが「心のケア」を受け始めてから、受診・相談理由となった問題に何らかの良い方向の変化がみられましたか」という設問に対して次の結果（図１）を得た。(N=55)

図１．心理療法によって、受診時の問題によい変化が得られたか（直接処遇職員対象）



すなわち、約６割の職員が積極的に評価し、約４分の１の職員が否定的に評価していた。

また「子どもが受けている「心のケア」は全体的に効果があると思いますか」という設問に対する結果（図２）は次のようであった。(N=60)

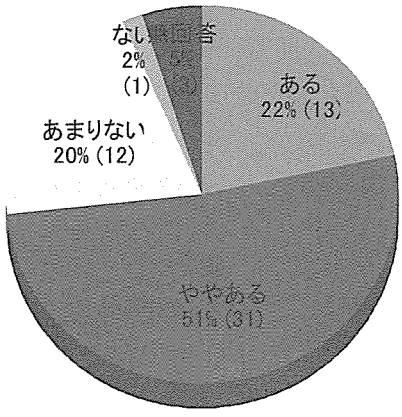


図２．心理療法の全般的な効果について（直接処遇職員対象）

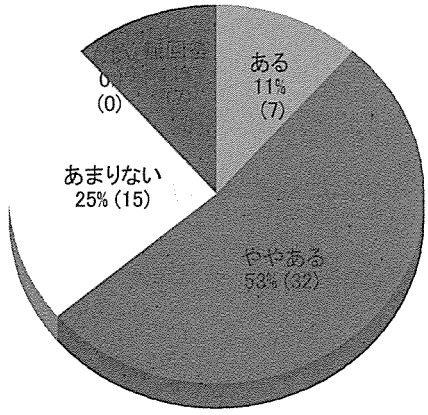


図３．心理療法の全般的な効果について（心理療法担当職員対象）

すなわち直接処遇職員の約７割が児童の受ける心理療法に効果を認めているが、２割は否定的であった。

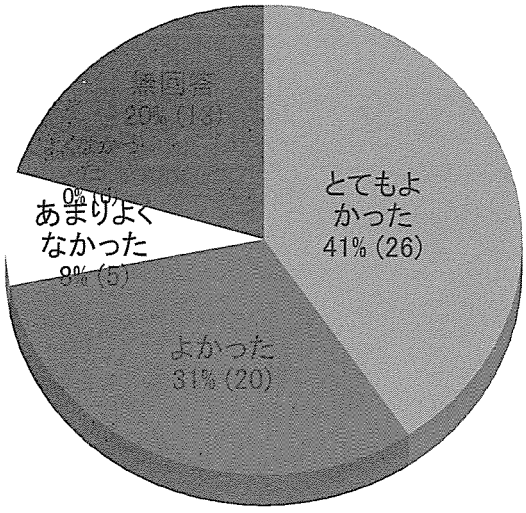
また、心理療法担当職員に行った「「心のケア」をおこなって、主訴（相談・受診理由）となった問題に何らかの良い方向の変化がみられたと思われますか」という設問では次の結果（図３）を得た。(N=61)

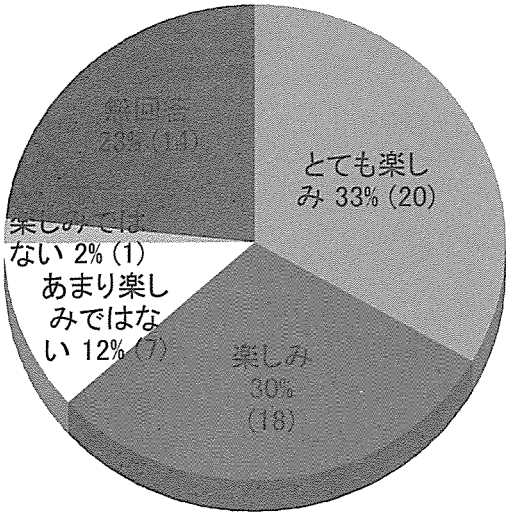
すなわち、施設の心理療法担当職員の４分の１が心理療法が十分な効果を与えていないと感じており、６割が効果を得ていると考えていた。

では児童はどのように捉えているのだろうか。本解析の対象の２施設の児童数は91名で、その内 64 名(70%)が何らかの形の心理療法を受けている。その児童への「行ってよかったですか？」の設問(N=64)、および「行くのが楽しみですか？」の設問(N=60)に対してそれぞれ次のような結果（図４，図５）であった。

この結果からは、60ー70%の児童らは心理療法に積極的な意味を見出していることが見られる。

図４．心理療法に「行ってよかったですか？」
（児童対象）





さらに児童に「行ってみて一番よかったことは何ですか？」と尋ねると次のような結果であった。

話しを聞いてもらえる	6 (10%)
遊んでもらえる	32 (54%)
くすりをもらえる	0 (0%)
職員と出かけられる	2 (3%)
困ったことがなくなった	1 (2%)
その他	4 (7%)
無回答	14 (24%)

児童は、心理療法の場を遊びの場と位置づけている感はあるが、自由記述欄には１対１で遊びを通して自分に関わられることを肯定的に捉える記述が散見された。また「もし、自分が相談していなかったら、このままどうなっていたのかこわい」と、言語的心理療法に積極的意義を見出している児童もみられた。

本稿の報告は限定的なもので、今後すべての施設について更に細かく解析しテイク予定である。

また、演劇療法を導入すべく音楽療法をその前提として採用して、経過観察を行っている。この成果に関しては、児童の行動の変容をCBCL、CMTI 等によって評価してきた。次年度に治療の成果について評価する予定である。

Ｄ．考察

現在、心理療法に関する一般的評価については、すべてのデータを解析中である。２施設の部分的解析では、心理療法について直接処遇職員、心理職員、入所児童も積極的な意義を見出しているようである。これらについて、心理療法の形式、頻度、本人の属性によって選択可能性が存在することも考えることができる。

Ｆ．研究業績

論文発表

田中究：多重人格の臨床．精神医療 44 号 Page008-017(2006.10)

学会発表

田中究（神戸大学医学部附属病院 精神科神経科），岩本直子，松井裕介，内藤憲一，伊東恵子，本多雅子，WangYaping：Asperger 症候群の経過中に統合失調症を発症した 13 歳女児例．日本児童青年精神医学会 47 回総会抄録集 Page297(2006.10)

三家英彦（神戸大学医学部附属病院 精神科

神経科)，吉住寿美香，袖岡里奈，田中究：入院環境の中で成長していった被虐待歴をもつ 15 歳女児．日本児童青年精神医学会 47 回総会抄録集 Page164(2006.10)

竹中佳奈栄(小野市立小野市民病院)，岩本直子，北山真次，田中究：家族画の中に遺影を描いた「飲み込めない」男児の症例．日本児童青年精神医学会 47 回総会抄録集 Page100(2006.10)

著書

田中 究；石川 元（編）：アスペルガー症候群と子ども虐待，現代のエスプリ(464)；アスペルガー症候群を究めるⅠ，至文堂 2006.3

「心のケア」に関する実態調査

（施設長様）

近年、児童養護施設入所児童の入所に至る経緯はますます複雑化・多様化してきており、その対応においてもより個別的で木目細かい配慮を要するようになってまいりました。また国の施策としても、2006年度より施設内心理士の常勤配置が本格的に導入され、入所児童に対する心理的な援助はますます重視されるようになっています。

本調査は、現在児童養護施設において行われている「心のケア」の実態を把握し、今後のより良い援助に活かそうとするものです。本調査の趣旨をご理解いただき、ご協力いただけますよう、よろしくお願いいたします。

本調査は、兵庫県児童養護連絡協議会心のケア専門委員会の協力の下、神戸大学大学院医学研究科展開医科学環境応答医学精神神経科・田中究、甲南大学大学院人文科学研究科人間科学専攻・森茂起、大阪大学人間科学研究科臨床教育学講座・西澤哲が統括責任を持ち、実施いたします。また、調査結果は本調査の目的のみに活用するものであり、原資料は全て田中究・森茂起・西澤哲が管理し、調査終了後は全て廃棄いたします。

本調査の結果につきましては、個人情報に十分配慮して兵庫県児童養護連絡協議会心のケア専門委員会を通して公表し、学会誌等に結果を発表する予定です。本調査は、厚生労働科学研究費補助金(17130301)（研究代表者：奥山眞紀子「児童虐待等の子どもの被害及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究」の補助を受けて行われます。